現実の選択、現実の生活

最終報告書:

女の子を対象に出生から成人まで18年間追跡したグローバル調査の成果

概要報告書

目次

はじめに:

調査方法、出生から大人に至るまで 6

女の子たちが教えてくれたこと:

教育、ジェンダー規範への抵抗、無償のケア労働、健康と幸福、SRHとCEFMU、暴力と保護、主体性・リーダーシップ・関与、ディーセント・ワークへの志望と道筋、気候変動と食料不安

私たちが学んだこと 34

結論 36

提言 37

「この[*現実の選択、現実の生活*]のインタビューは、いつも私の考えを広げてくれます。ときには、自分では思いもよらなかったことについても考えるきっかけを与えてくれます」

Amelia、17歳(2024年)、ウガンダ

「社会のことなど、いろいろなことについて私の意見を聞いてもらえて、とてもよかったです。この調査に参加できてうれしいです」

Juliana、17歳(2023年)、ブラジル

表紙: エルサルバドルで、コミュニティの変革を主導する16歳の女の子
© Plan International
本ページ: ウガンダで、小学校にある保健クラブのメンバー
© Plan International

序文

Reena Ghelani、最高運営責任者、プラン・インターナショナル

過去20年間で、世界は多くの分野で進展を遂げてきました。極度の貧困は1世代の間で半減以上し、教育における世界的なジェンダー格差も大幅に縮小し、現在では大部分の地域で、女の子の初・中等教育への就学率が男の子とほぼ同水準に達しています。

しかし、それらの前進は均等に進んでいるわけではありません。多くの地域で、女の子はその恩恵を受けられず、むしろ状況は悪化しています。ですが、私たちは彼女たちの声を人生にわたり傾聴することが、解決へと導くのを知っています。

18年間にわたり、*「現実の選択、現実の生活」*r報告書の中心となってきた女の子たちは、自身の物語を私たちに託してきました。彼女たちは、希望や夢、そして直面してきた困難を語ってくれ、また、彼女たちが前進するためにどんな支援が役立つのかも教えてくれました。本報告書は、彼女たちの生活のあらゆる面から私たちが学んだことを反映しており、彼女たちが経験した実際の変化や、前の世代にはみられなかった目覚ましい成果の獲得が示されています。

また、彼女たちが何をすべきか、すべきでないかに関するに関する長年の通念に抗い、彼女たちの声は重要であると主張している、そうした通念に抗う女の子たちの姿も紹介しています。

しかし、彼女たちの生活を形成する要素は今も強固なままです。ジェンダー規範は、彼女たちの機会を制限し続けており、彼女たちを保護・支援するための公的制度は、逼迫し、十分な資源が確保されていません。そして、これまでに成し遂げられた前進は、脆弱であり、経済的圧力の高まり、紛争の激化、気候変動の影響の深刻化に直面する中で、反人権運動の勢いも増しています。

本報告書は、自身の可能性を制限する考え方に挑み、自身の声が聴かれることを強く求めている女の子の物語を紹介しています。適切な支援があれば、彼女たちは大きく成長することができます。今こそ行動を起こすことが、彼女たち、そして次の世代のすべての女の子のために必要です。これまでに積み重ねてきた成果を守り、新たな脅威に立ち向かい、すべての女の子が自らの権利を実現し、自らの未来を切り拓ける世界を築くために。

2025年時点の調査対象の女の子

本調査終了時点における状況

調査対象国は
9カ国

調査期間は
18年間

開始は女の子の出生年である
2006年

終了は女の子が18歳を迎えた
2024年

エルサルバドル

2024年時点で、5名の女の子が中等教育を修了し、2名が中等教育を修了した。4名の女の子は中途退学した。

「神の御加護があれば多分、学位取得を目指して勉強して、多くの機会があり、収入も安定したキャリアに進むでしょう。[何を勉強したいですか] ...国際関係って言う学問です」

Gabriela、14歳、2021年

ドミニカ共和国

7名の女の子が中等学校を卒業し、内5名が大学に進学した。3名の女の子は結婚したが、学業の再開、または職業訓練を受けたいと望んでいた。

「人の悩みについて話を聞くようなものだと言われますが...それは私を幸せにします」

Saidy、15歳、2021年

カンボジア

5名の女の子が中等教育の修了間近で、1名は既に卒業し、大学に進学していた。

「(叔母さんのように)先生になり、若い世代に知識を共有したいです」

Nakry、14歳、2021年

ベトナム

本調査に参加し続けた8名の女の子は全員、中等教育の修了間近で、将来に対して大きな希望を抱いていた。

「学業を続けたいです[...]Da Nang経済大学を選びました」

Kim、17歳、2024年

ベナン

6名の女の子が中等教育を修了し、1名は高等教育に進み、1名は見習いを始めていた。

「無事に学業を終え、自分の助産院を開業できたら、本当に幸せでしょう」

Jacqueline、12歳、2019年

ブラジル

6名の女の子は中等教育課程に在籍しており、2名は既に卒業していた。彼女たち全員が大学進学、または明確なキャリアの目標を持っていた。

「私は、夢を諦めず、望むものを獲得するまで粘り強く続ける、強く意志の固い人物になりたいです」

Bianca、17歳、2024年

トーゴ

3名の女の子が中等教育を修了間近であった。4名の女の子は中途退学したが、復学または職業訓練を受けることを希望しており、3名の女の子は職業訓練を受けていた。

「私は自分の店を持ち、自分で経営する予定なので、私の人生は母のものとは違うものになるでしょう。[...]母と同じく結婚はするでしょうが、母のように子どもをたくさん持つつもりはありません」

Djoumai、11歳、2017年

ウガンダ

7名の女の子が中等教育を修了し、1名が職業訓練を受けていた。4名の女の子は中途退学したが、復学または職業訓練を受けることを望んでいた。

「将来の目標は変わっておらず、子どもの頃からずっと医者になるのを夢見ていて、今でもそれは変わりません...小児科医になりたいです」

Justine、17歳、2024年

フィリピン

11名の女の子が中等教育の修了間近であり、2名は卒業しており、その13名全員が、高等教育への進学を強く希望していた。1名の女の子は妊娠により中途退学していたが、学業の修了を望んでいた。

「看護師になりたいです[...]他の人を助けられるように」

Jasmine、14歳、2020年

ベトナムで、子どもクラブに参加する女の子たち
© Plan International

はじめに

「自分の声を聴いてもらえると、人びとが女の子のことを気にかけてくれていると わかると、うれしいです」

Bianca[1]、17歳(2023年)、ブラジル

過去18年間にわたり、プラン・インターナショナルの調査*「現実の選択、現実の生活」*は、女の子たちを出生から成人まで追跡してきた。本調査では、彼女たちと彼女たちの保護者から毎年データを収集し、彼女たちの人生の様々な段階で達成された進展や直面してきた困難を詳細に捉える機会を提供している。本調査の対象となった女の子たちは、ベナン・ブラジル・カンボジア・ドミニカ共和国・エルサルバドル・フィリピン・トーゴ・ウガンダ・ベトナムの9カ国の、社会経済的に最も困難な状況にある家庭の出身である。各国において、彼女たちの多くは地方部のコミュニティに暮らし、その多くの家庭が農業を主な生計手段としていた。これほど長期間にわたり同一の子どもたちの生活を追跡した調査は極めて少なく、本調査は、女の子のみに焦点を当てた唯一の調査である。

- **142名の女の子が本調査対象者となり、2024年の調査終了時点で92名が残っていた[2]**
- **2024年までに、女の子の65%が中等教育を修了、または修了見込み**
- **女の子の9%が大学に進学**
- **女の子の13%が、18歳未満で結婚または婚姻関係にあった**
- **女の子は1日に平均5時間15分を無償のケア労働に費やしていた**
- **女の子の91%が、11歳までに暴力を経験したと報告した**

*「現実の選択、現実の生活」*調査は、女の子の声を中心に据えており、彼女たちは成長とともに、自らの言葉で自身の物語を語ってきた。本調査への参加は、単なる質問への回答に留まらず、自身を表現すること、自分の声が聴かれること、身の回りの世界について考えること、そしてジェンダー平等の実現に向けた前進に資する対話に貢献することを目的としていた。

1 プライバシー保護のため、調査対象者の女の子全員の名前は変更されている。
2 調査期間中には、自らの意思で調査から離脱した者や、調査対象地域外への転居、また残念ながら死亡したことにより、調査対象から外れた者も一部に見られた。また、プラン・インターナショナルの国別事務所の管轄地域範囲の変更も、参加の継続性に影響を及ぼした。

「本調査によって、これまで口にしたことのなかったことを語る機会を得られ、うれしいです」

Kannitha、17歳(2023年)、カンボジア

「(女の子は)自分が人生で何をしたいのか、そしてそれをどう実現するのかを分かっている存在です」

Rebeca、18歳(2024年)、ドミニカ共和国

本調査は、女の子の声や経験、そして変化に向けた提言を中心に据え、彼女たちの生活・意見・望み・夢に関する他に類を見ない洞察を提供している。また、幼少期～思春期の経験について、かつてない深さで理解する機会をもたらしている。

調査方法

本調査は、変化と正義に向けた女の子の提言が、本調査にとどまらずプラン・インターナショナルの活動全体においても中心に据えられ、広く発信されることを意図し、フェミニスト調査原則に基づく参加型アプローチを確立した。

本調査の中核的調査方法は、女の子が出生した2006年から毎年実施された、女の子本人と彼女たちの保護者への詳細な半構造化インタビューに基づいていた。毎年、彼女たちの保護者1名にインタビューを行い、2013年以降は彼女たち本人へのインタビューも実施した。その18年間、彼女たちの意欲をそそり、年齢に応じた形でインタビューを実施するよう、様々な調査方法を採用してきた。詳細は本報告書全文を参照されたい。

出生から大人に至るまで

「[*現実の選択、現実の生活*]で多くを共有できることと、自分の経験を共有することが子どもの保護に役立つ可能性があることを、とてもうれしく思います」

Sen、18歳(2024年)、ベトナム

本調査対象者の女の子は、比較的希望に満ちた時代に生まれた。すなわち、ジェンダー平等が国際社会や各国政府の重要な取り組み分野となり、女の子の権利が特に注目を集め始めていた時期に彼女たちは育った。本調査結果は、そうした環境が彼女たちの生活に与えてきた影響を示している。

女子教育の分野で、それまでの世代と比べ、学業を継続・大学進学をする女の子の大幅な増加がみられる等、実際に認められる成果は存在する。こうした傾向は、本調査の対象者にも当てはまっている。

また過去18年間、ジェンダー平等や不平等は重要な論点となっており、そうした意識の向上は、調査対象者の女の子の家庭・コミュニティ生活にも反映されていた。

前進がみられるとはいえ、それらは、貧困・紛争・気候変動・援助予算の削減・女の子と女性の権利を後退させる保守的な価値観への世界的な政治的転換などにより生じる現実の課題と、常に向き合っている。前進は容易ではなく、常に反発にさらされている。

本報告書は、18年間の調査結果を示している。長年にわたり、私たちは女の子たちから、彼女たちの生活のさまざまな側面について話を聞いてきた。彼女たちが語った前進と課題を詳しく分析するため、本報告書では、調査から得られた知見を、教育/ジェンダー規範への抵抗/無償ケア労働/健康と幸福/性と生殖に関する健康(SRH)/早すぎる強制された結婚(CEFMU)/暴力と保護/主体性/ディーセント・ワーク/気候変動と食料不安の項目に分類した。本報告書では、ジェンダー規範に積極的に挑んでいる領域を含む、彼女たちの権利に関し達成された前進と、そうした苦闘の末に獲得した成果を脅かす継続して存在する課題に焦点を当てている。

今やユース女性となった本調査の対象者は、私たちに今後の方向性を示している。すなわち、これまでの前進を基盤としてさらに進展できる分野、変化が求められる分野、そして女の子の権利に対する高まる脅威を軽減するために重点的に取り組むべき分野である。

本調査結果は、変化が可能であることを示している。私たちは、世界中のあらゆる女の子が自身の権利の行使を実現し、自身の可能性を最大限に発揮できるよう、取り組みを加速させなければならない。

「[*現実の選択、現実の生活*]で、さまざまなことを学びました…様々な場所の多くの女の子たちの物語について」

Griselda、18歳(2024年)、ドミニカ共和国

ドミニカ共和国で、仲間主導の教育セッションを通じて月経衛生管理について学ぶ女の子たち
© Plan International

1.教育

女子教育の分野は、国際的な取り組みにより実質的な前進がみられた領域の1つである。本調査期間中、世界全体で女の子の初等・中等教育の修了率は上昇し、男の子と同水準に達している[i]。だが、調査対象者の女の子の経験は、リソース不足やジェンダー規範により、彼女たちの教育の享受や修了が今なお脅かされていることを示している[ii]。

「女の子も学ぶ権利と将来仕事を見つける権利があるため、女子教育は大切です。私たちの親は学校に通っていなかったので、私たちは学校に行かなければなりません」

Essohana、17歳(2023年)、トーゴ

ベトナムで、教室で女の子の学習を支援する教師
© Plan International

ほぼすべての女の子と多くの保護者が、女子教育を重視し支援していた

「私のように教育を受けられなかった人間になってほしくないので、子どもには勉強してもらいたいです。専門性を身に付け、いい人生を送ってもらいたいです」

Nicolの父親、2009年、ドミニカ共和国

大多数の女の子が自身の母親の学業修了レベルを上回り、世代間での好ましい進展がみられた。

調査対象の女の子の

65%

が中等教育修了または修了間近であった

調査対象の女の子の

9%

が既に大学へ進学していた

各国の女の子と彼女たちの保護者は、教育の質に対する懸念を示した

学校のリソース不足・訓練が不十分な教師・暴力行使に関する情報が聞かれ、身体的懲罰を受けた女の子は、それが学校に行く意欲の低下につながったと語った。

「先生に時々殴られて、気分が悪くなります」

Ladi、7歳(2013年)、トーゴ

女の子の安全な就学を左右する重要な要素の1つは、通学の安全性と利用可能性であった

調査の初期段階では、保護者が労働や家庭内の責務のために登下校の付き添いに時間を割くことができず、娘を就学前教育や初等教育の初期段階に通わせられなかった場合がみられた。彼女たちは成長するにつれ、自身から、交通事情・バイク運転の危険性・異常気象の影響が、通学の妨げとなることが頻繁にあると述べるようになった。

「時々川を渡らなければならない生徒がいて、川の氾濫時には流れが激しくて、渡ることができません」

Stephany、16歳(2023年)、エルサルバドル

家事や経済的制限が重大な障壁であった

女の子の学業支援のために彼女たちの家事を減らした保護者も一部いたが、経済的制約や家庭を支える必要から中途退学した者もいた。こうした状況下で、男の子の教育が優先される傾向があった。

「彼女の今後の教育費を負担できないので、6年生または7年生で彼女を中途退学させざるを得ません。もし経済的に余裕があるなら、彼女の高等教育への進学を支援しますが」

Davyの母親、2015年、カンボジア

家計を助けるため、彼女たちの多くが有償労働をし、パートタイムで働く者や、学業を完全に辞めてしまった者もいた。

「父が亡くなってから、家族を支えるために働く責任があります…他の女の子みたいに勉強したいので、とても悲しいです」

Reaksmey、16歳(2023年)、カンボジア

彼女たちは2023年、家庭の経済的困難と食料不足によりメンタルヘルスが脅かされていることや、家族に関する心配が学業に与える影響について語ってくれた。

「家族のことが気になり、皆が無事か心配で、勉強に集中できません。毎日の食事のことも気になっています」

Christine、17歳(2023年)、フィリピン

望まない妊娠やCEFMUにより中途退学した女の子もいた

スティグマと**保育サービス**の欠如により、その多くが復学できなかったままであった。

「勉強したいけど、子どもの面倒を見てくれる人がいません。本当に高校を卒業したいのですが」

Melanie、17歳(2024年)、フィリピン

Folamiの物語

Folamiの物語は珍しいものではない。彼女はトーゴの地方部に住み、彼女の人生のほとんどの期間において、家族は、彼女の家族は経済的困難を経験していた。食べ物の入手は常に困難で、学費の支払いが不可能であることが多かった。母親が仕事を探せるよう、長女のFolamiは9歳から家事を担うようになった。彼女が担う家事の量が増えるにつれ、授業への出席は一層困難になっていった。彼女は15歳で妊娠し、それによるスティグマと経済的圧力が重なり、彼女は中途退学することとなった。

> *「今は赤ちゃんがいるので学校に通っていません…妊娠したことを恥じているので、自分でそう決めました」*
>
> **Folami、17歳(2023年)、トーゴ**

それ以前から学業の遅れがあったFolamiは、教室に戻ることに抵抗を感じつつも、職業訓練を受けるという選択肢を検討していた。その時点でも、資金不足の状況は続いていた。彼女の物語が示す通り、貧困・ケア責任・スティグマは、女の子の教育を頓挫させ、将来の機会を制限する選択を余儀なくさせる。

プラン・インターナショナル・ウガンダが支援する学校で、けんけんぱ遊びをしている女の子
© Plan International

2. ジェンダー規範への抵抗

過去18年間、ミレニアム開発目標および持続可能な開発目標において重要な目標とされてきたジェンダー平等をめぐり、活発な議論が行われてきた。現時点で、その目標達成には至っていないが、こうした議論の広がりは、既存の考え方への問い直しや行動の変化を促し、女の子と女性の権利に関する課題を社会の中で可視化してきた。

こうした動きは、調査対象の女の子たちとその家族にも影響を与えている。彼女たちは、幼少期から思春期にかけて思春期を通し、どこへ行くべきか、何をすべきか、どのように振る舞うべきかといった、生活の様々な面において、今もジェンダー的に期待される役割・行動を教えられている。しかし、それらの「規範」はもはや無批判に受容されるものではなくなった。期待に従う女の子もいる一方で、それに挑む女の子もいる。現在、反権利の動きをとるアクターが、女の子を再び社会の周縁に追いやろうとする政治的な動きを強めており、ジェンダー的な期待が再び高まりつつある。女の子と女性の権利に対する敵意が高まる中、彼女たちが自身で選んだ抵抗の形を行えるよう、十分な支援を行うことが不可欠である。

「[学校の友人が]からかってきて、男の子みたいだって言うんです。いつも男の子とボール遊びしているって…でも私は、女の子も男の子と同じようにボール遊びができるのだから、それは性差別だと伝えています」

Juliana、12歳(2019年)、ブラジル

エルサルバドルで、Champions of Changeプロジェクトの一環としてサッカーを楽しむ女の子たち
© Plan International

本調査期間を通じて、女の子の半数が、ジェンダー的な期待に疑問を呈したり、拒否したりしていた

調査対象者の女の子は、教育の重要性・大学での勉学・将来のキャリアに対する、強い意見を持っていた。

「今は平等の時代です。男の子も女の子も就学できます。昔のように、男の子は学校に行けて女の子は行けないといった差別は、もうありません」

Hang、12歳(2017年)、ベトナム

女の子の15%は、彼女たちの人生のどこかで、家事分担を疑問視、または明らかに拒否したことがある

「両親は、男の子を畑仕事に専念させ、女の子に家事への専念を望んでいます。私はそれが不公平だと思います。私たち女の子が植え付けや収穫の手伝いに畑に行かなければいけないのと同様、男の子も何らかの家事を手伝えるはずです」

Essohana、10歳(2016年)、トーゴ

また、女の子と男の子の家事分担を公平にするよう求める意見もあった。

「男の子も女の子と同じ責任を負うべきです! [...] [そうなっていないのは]彼らが怠け者だからです」

Griselda、13歳(2019年)、ドミニカ共和国

彼女たちは成長するにつれ、「女性らしさ」や「男性らしさ」といった社会的概念に基づく期待に挑むようになった

女の子の多くは、どの遊びやスポーツをすべき、どんな服を着るべきといった、女の子の振る舞いに関する保護者の考えに異議を唱えていた。また彼女たちは成長するにつれ、男の子との交流を禁じられた。彼女たちの多くが、保護者に認められない中、恋愛関係を秘密にしており、それ自体が反抗の1つの形ではあったが、危険を伴うものでもあった。また、保護者に知られずに仕事をしていた女の子もみられた。

ジェンダー規範の変化には困難が伴うことが示されており、過度な無償ケア労働・移動制限・望まない妊娠が、女の子を家庭内にとどめ続けている

女の子の公共空間の利用や移動の自由は、状況を変えるのが特に困難な部分であることが明らかになっている。保護者と多くの場合女の子自身も、公共空間が女の子と女性にとって危険であると認識している。

現在の政治情勢もまた、女の子の成長に関わってきたジェンダー規範に挑む彼女たちの行動を制限している

ジェンダー平等や女の子と女性の権利に対する敵意の高まりが、男性的・女性的という明確に定義された役割への回帰を促し、女の子の機会を再び制限している。

長年の調査から、保護者、特に母親は、女の子の権利を支持し、自分たちとは異なる選択をし、よりよい人生を送ってほしいと願っていることが多い一方で、その実現には多くの障壁が存在することが明らかになっている

3. 無償ケア労働

無償ケア労働は、不平等の主要な要因の1つとなっている。女の子は成長するにつれ、自由に使える時間が奪われていき、結果として、教育・技能訓練の機会や、交流・休息の時間が制限される。それらはすべて、彼女たちの健康と幸福に悪影響を及ぼす。これはジェンダー規範の1つであり、世界的な統計や私たちのインタビューが示す通り、この状況を変えることが難しいことが明らかになっている。調査結果からは、この状況が改善する兆しは見られない。

「男性が中庭を掃いているところを見られるのは、恥ずかしいことです」

Nini-Rikeの母親、2017年、トーゴ

3世代の女性たち、トーゴ

本調査全体で、女の子の95%が無償ケア労働に従事していると回答しており、その平均時間は世界の大人の女性を上回り、1日あたり約5時間15分におよぶ

一方で、男性の家族は割り当てられる家事の量が少なく、時間もそれほど要しないため、状況は大きく異なる。

「私たち女の子が家事をするなら、男の子もやるべきです。それはおかしいと思います」

Raisa、12歳(2018年)、ドミニカ共和国

本調査で一貫して、女の子が極めて幼い頃から、将来の妻や母親となる役割に向けて準備させられていることが判明した。

「彼女は家事、特に5リットルの容器で水を運ぶことや姉妹と一緒に皿洗いを手伝ってくれます」

Mirembaの母親、2011年、ウガンダ

家事により、女の子は常に時間に追われており、彼女たちの多くが、学業と家事の両立に苦労している。

「ついていけなくて、ついに校長先生から退学処分を受けてしまいました」

Eleanor、17歳(2024年)、ベナン

女の子のケア責任は、彼女たちの幸福感にも広範な影響を及ぼしており、彼女たちの多くは、趣味の時間を犠牲にし、友人や家族と過ごす時間を確保できていなかった。

「友人と出かけて話すこともできません。今は学校の課題と、姪と甥の世話で忙しいので」

Reyna、16歳(2023年)、フィリピン

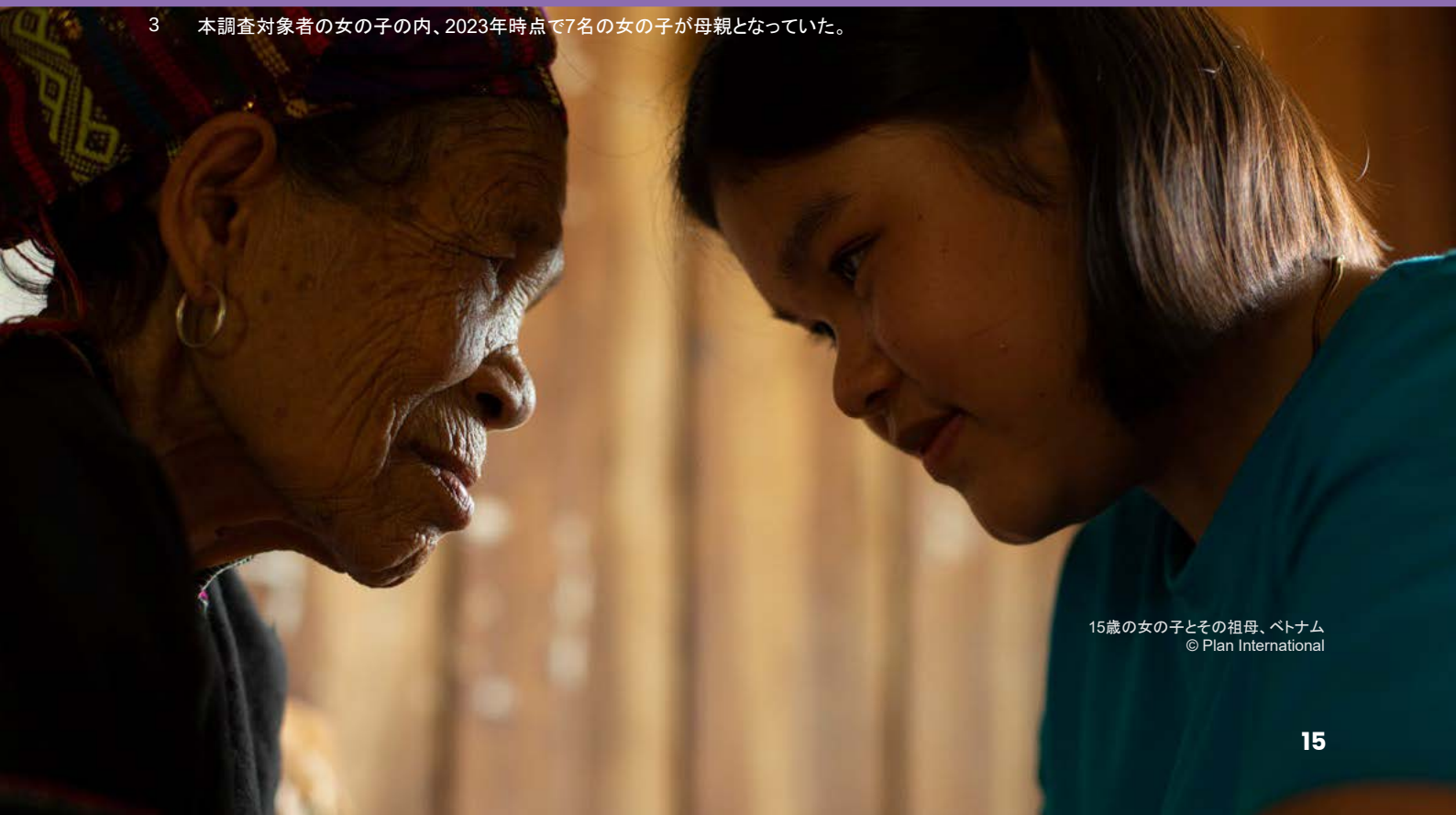
女の子は中途退学すると担う責任が増え、その結果、将来に向けて職業スキルを身につける時間も確保できなくなる。

「家事に費やす時間を減らし、作業場で過ごす時間を増やしたいです。縫製を極めたいので」

Nini-Rike、17歳(2024年)、トーゴ

結婚または婚姻関係にあり、子どもを1人以上持つ調査対象の女の子のケア負担は、シングルマザーの女の子(約14時間半)の約1.5倍に達している。さらに、シングルマザーのケア負担は、扶養家族を持たない既婚の女の子と同程度(約8時間)であり、男性が家事や育児にほとんど関与していないことが明らかとなっている。

3　本調査対象者の女の子の内、2023年時点で7名の女の子が母親となっていた。



15歳の女の子とその祖母、ベトナム
© Plan International

4.健康と幸福

18年間の調査期間を通じて、ワクチンの普及や公衆衛生のいくつかの改善に関して前進がみられ、また家族からも、健康や栄養に関する啓発キャンペーンが有益であるという評価が得られた。しかし、貧困・社会的規範・ジェンダー・年齢といった要素が、適時かつ質の高い医療へのアクセスを左右する決定的な要因であり続けている。こうした状況は、マラリア・結核・デング熱・栄養失調・貧血などの重大な健康問題を経験してきた調査対象の女の子に顕著にみられた。

赤ちゃんに予防接種を行う医師
© Plan International

本調査期間を通じて一貫して、女の子の健康と栄養に関する自主的な行動と知識の向上が認められた

治療費は高額であったが、本調査対象者の女の子の保護者の多くは、自分の子どもの健康が優先事項であると明確に述べた。

「私は…軍病院に子どもに頻繁に検査を受けさせるために連れて行き、定期健診を年3回受けさせています」

Senの母親、2015年、ベトナム

質の高い医療の享受は、制限されている場合が多い

近くに診療所はあるものの、医療の質が低い、または提供されるサービスが限定されているため、より大きな医療機関で包括的な治療を受けるために長距離の移動を余儀なくされたと語る家族もいた。4名の女の子が適時に治療を受けれず、幼少期にマラリアで亡くなった[4]。

「診療所はかなり遠く、ここから徒歩で2時間程かかります。子どもを抱えて行かなければいけなく、具合が悪い子どもはハンモックに乗せて運びます」

Hillaryの母親、2013年、エルサルバドル

医療費が高額で支払えない家族もみられた

調査対象者の女の子の14%が栄養不良や発育阻害に苛まれ、その多くの家族は、幼少期の治療費を負担することができなかった。乳幼児期に発育阻害/低体重と診断された女の子の生涯罹患率は、他の女の子より高かった。

「健康診断を受けるお金がないです…お金が入るのを待っているところで、入れば健康診断を受けられます」

Maricel、16歳(2023年)、フィリピン

薬の価格や全体的な供給量は、調査対象者の女の子の家族の多くにとって特に大きな障壁であり、ウガンダの保護者は頻繁にその点に言及した。

「大抵、病院で朝から昼まで並んで待っても、「薬がない」と言われ、薬はありません。さらに、そもそも薬を買うお金が足りない、あるいは全くないこともあり…薬を買うためのお金がないこともあります」

Ameliaの母親、2018年、ウガンダ

マラリア治療薬の入手可能性の低さが重大な懸念事項であった。女の子は18年間で、平均9回マラリアに罹患していた。5歳までに、10名の女の子が、痙攣を伴う重症マラリアの症例を含め、2回以上マラリアに罹患していた[5]。

各国の調査対象者は、診療所や病院の人員・設備・医薬品の不足を訴えた

「薬も包帯用のテープもないので、医者は私たちを送り返す他ないのです」

Nataliaの母親、2018年、ブラジル

医療従事者の訓練は慢性的に不十分であった

医療の費用の高さや質の低さのため、伝統的な薬や民間療法に頼ることになった家族もいた。

「病院にかかるのはお金がかかるし、子どもの治療に必要な薬草も分かっているので、習慣的に子どもを病院に連れて行くことはありません」

Eleanorの母親、2016年、ベナン

診療費を理由に伝統的な治療に頼る人びとが見られる一方で、医療機関への恐怖や不信感から受診を避ける人びともいた。健康教育の不足、特にメンタルヘルスに関する認識度の低さが、一部の保護者に症状を「伝統的な病気」や悪魔の攻撃の表れと解釈させる事態を招いていたこともあった。

4 マラリアによる死亡率は感染後1日以内に最も高くなるため、迅速な診断と適切な治療が求められる。世界保健機関は、症状の発症後1日以内の治療実施を推奨している。従って、マラリアが起きやすい地域で、医療施設の利用ができないことは、人命に関わる事態である。

5 痙攣は脳マラリアに一般的な症状だが、他の重症マラリアでもみられることがある。

公衆衛生キャンペーンは実施されているが、調査対象の女の子の家族の多くが有する健康に関する情報・知識は限られていた

調査対象の女の子の内、アフリカと東南アジアにいる10名が、計15件の腸チフス感染症例に関係していた。それらの症例すべてで、家族が未処理の井戸やポンプから水を汲んでいると述べており、その多くが、水を使用前に沸かしていないとも述べた。

女の子に影響をおよぼす多くの疾患は、早期治療や予防が可能であったと考えられるが、人材面や社会的な障壁が依然として存在し、医療の享受を妨げ続けている

カンボジアで、新たに開設されたコミュニティ医療センターの開所式に出席する18歳の若者の母親
© Plan International

5. SRHとCEFMU

世界的に、CEFMUの発生率は減少しており、本調査の対象となった女の子にも同様の傾向が見られる。しかし、SRHに関する情報提供は依然として不足している。女の子は、月経・避妊・生殖に関する健康に関わる情報を必要としており、明確にそれを求めているが、実際に与えられる助言は、主に男の子から距離を置くようにという内容にとどまっていた。

「[母から] 生理時は、本当に自分の体を大事にしなければならないと…酔った男性たちがいるから、自分の体に気をつけなさい、と言われました」

Valeria、11歳(2017年)、エルサルバドル

エルサルバドルで、月経衛生教育プロジェクトに参加し、月経衛生キットを受け取った18歳の参加者
© Plan International

女の子の月経が始まると、彼女たちはユース女性とみなされ、保護者は、彼女たちの純潔の維持や行動の管理を通じた妊娠の防止を最優先事項とした。彼女たちは、男の子と今後遊ぶことの禁止・淑女のように振る舞うことの要請・幼稚な遊びの禁止等、厳しい指示を受けた。

「Nakryには「もう大人なのだから、自分の体に気をつけなければならない」と伝え、ブラジャーを着けるように言っていますが、彼女はそれができません。もう幼稚なことは止めるようにとも伝えました。地元の村人も自身の娘にブラジャーを着けるよう言っています。Nakryがレイプされないかと心配です」

Nakryの母親、2017年、カンボジア

女の子が保護者から学んだSRHの内容は、危害から身を守るために男性や男の子との接触を避ける必要性に重点が置かれていた。性は、抑制し最小限にとどめるべきものと捉えられていた。彼女たちは、望まない妊娠や性暴力から身を守ることでさえ、彼女たち自身の全責任であると考えるように教えられた。

調査対象者の女の子の多くは、性と生殖に関する健康と権利(SRHR)に関する公式な教育を受けておらず、包括的性教育(CSE)を受けたのは、わずか10%にすぎなかった。

女の子は性に関する健康の情報を求めていたが、調査対象国全9カ国で、保護者は禁欲を説く内容を超えたテーマに関して娘と話し合うことに、不快感を覚えたり、知識・能力不足を感じており、また、父親がこうした会話に関与することは恥ずかしいと考えられていた。

「それらに関しては、大多数の保護者は恥ずかしさを感じてしまうし、娘に話せる情報をあまり持っていない保護者もいます[...] 私たちはそうしたテーマについてあまり知らないのです」

Justineの母親、2021年、ウガンダ

「性について詳細に知りたいです。それは、男の子との交際を始めたときに役立つでしょう。妊娠や性感染症(STI)の予防法もわかるでしょうから」

Thea、15歳(2021年)、ベナン

SRHRは女の子にとって極めて重要な領域であり、これらに関する十分な情報提供と羞恥心の軽減は、女の子の権利の前進を維持し、彼女たちの機会と健康を守る上で必須である。

ベナンのコミュニティラジオについて

調査対象者の女の子は、保護者から自身の体や健全な恋愛関係について、より多くの情報を得たいと語った。だが保護者の多くは、そうしたテーマをどう取り上げればよいか確信が持てず、自身のSRHRに関する知識に自信がないようだった。

その対応として、2023年にCardiff大学と連携し、女の子の提言に基づき、思春期の若者のSRHRに関し、彼女たちと保護者の間での前向きな対話の促進を意図した、ラジオ番組を企画・制作し、放送した。

同ラジオ番組は家族を対象とし、「若者や思春期の子どもが正確な性と生殖に関する教育を受けられるようにする」ことを目的として、保護者が若者とこれらのテーマについて話し合うことを促した。

ベナンで展開された同プログラムから得られた知見は、SRHRに関する健全で前向きな世代間対話に向けた、今後の同様の取り組みに反映される。これらの知見は、私たちのガイダンスノートにまとめられている。

「月経時の衛生管理について、今までより理解が深まりました」

女の子のワークショップ参加者、14歳(2023年)、ベナン

CEFMUに関する世代間での前進

世界的なCEFMUの発生率減少は、SRHRの領域での数少ない前向きな要素の1つである。現行の法律も一助となっているが、調査対象者が暮らしていた多くのコミュニティで変化を牽引していたのは、年長の女性であった。彼女たちの保護者、特に母親は、自身のCEFMUの経験やそれに対する後悔から、CEFMUに反対していた場合が多かった。

調査対象者の女の子の内、18歳までに結婚または婚姻関係にあったのは13%だったが、彼女たちの母親の間では46%であった

保護者は、CEFMUを虐待的行為と指摘し、それがコミュニティにおいて違法な行為だと認識していた。

保護者は娘のよりよい未来を望み、CEFMUを教育や将来のキャリアの妨げと考えていた。

> *「[Margaret]が、仕事を見つける前に結婚してしまったら、彼女は大変苦しむでしょう…彼女の人生は私のとは違うものになるでしょう。私同様に苦しんで欲しくありません」*
>
> **Margaretの母親、2020年、ベナン(結婚時の年齢は非公表)**

> *「(14歳で娘を結婚させるのは)極めて重大な間違いです。14歳で結婚させられた人物は…実質的に人生を終わらせられてしまうからです」*
>
> **Biancaの母親、2021年、ブラジル(結婚時は14歳)**

女の子もまた、CEFMU、特に学業の中断や経済的理由による強制的なものに対して反対の意見を示した。

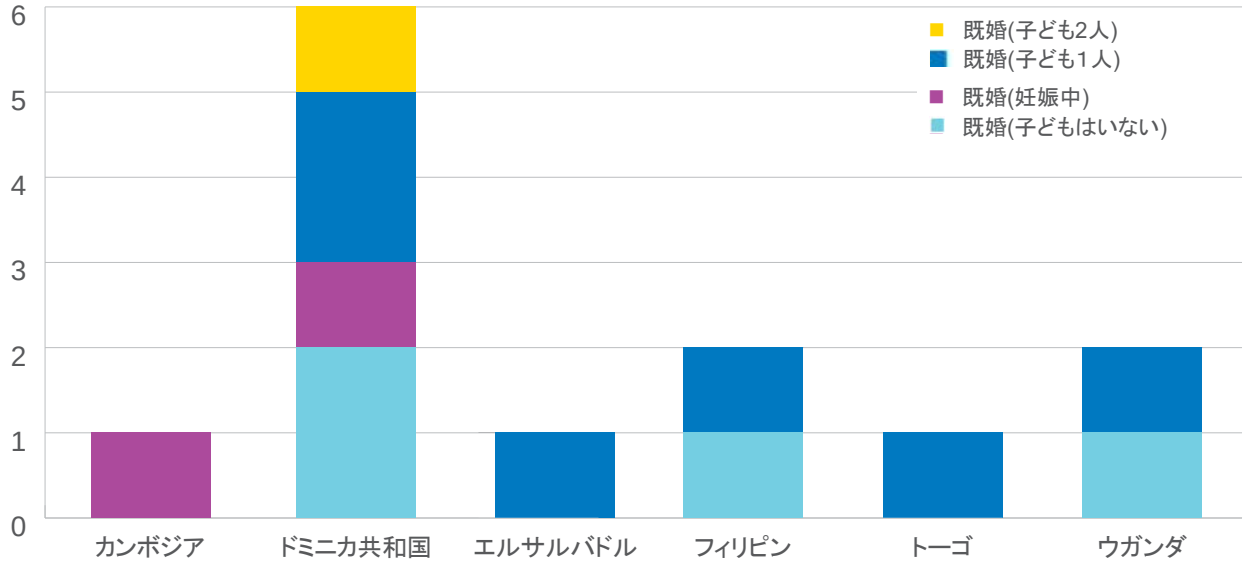
> *「私の人生は[母のと]違うものになると思う。すぐに交際を始めるつもりはありません。そうはならないと思います」*
>
> **Fernanda、10歳(2017年)、ブラジル**

> *「8年生までしか勉強しなかった彼女のような結末にはなりたくありません。彼女と違って、私はキャリアを築き、いい人生を送りたいです」*
>
> **Leyla、11歳(2018年)、ドミニカ共和国**

調査対象の女の子が17/18歳となった2024年半ば時点で、彼女たちの内12名が結婚または婚姻関係にあった[6]。その中の7名が母親となり、2名が妊娠中であると述べた。ある女の子は2024年までに子どもを2人もうけていた。

> *「子どもは過ちだったと人は言いますが、私の子どもたちはそうじゃありません[…]子どもたちに必要なものをすべて与えられている限り、心配はありません」*
>
> **Katerin、18歳(2024年)、ドミニカ共和国(結婚時は15歳)**

調査対象の女の子における既婚者の内訳(子どもの数別)



6 調査対象の女の子93名の内、18歳未満で結婚または婚姻関係にあったのは、以下の12名である。ドミニカ共和国のChantal・Griselda・Katerin・Leyla・Valerie、カンボジアのReaksmey、エルサルバドルのHillary、フィリピンのMelanie・Rubylyn、トーゴのAyomide、ウガンダのNamazzi・Joyである。2024年のデータ収集時には92名の女の子が調査に参加しており、1名については連絡が取れなかったが、その保護者からプラン・インターナショナルの国別担当チームに対して非公式な情報提供があり、当該女の子がパートナーと婚姻関係にあり同棲していることが確認された。また、過去18年間に本調査に参加した155名の女の子の中には、他にも18歳未満で結婚した者がいる可能性があるが、移住や連絡途絶により、その後の生活状況を把握することはできなかった。

6.暴力と保護

推定8億4,000万人の女性、すなわちほぼ3人に1人が、生涯で少なくとも一度は、親密なパートナーによる身体的または性暴力、またはパートナー以外による性暴力、もしくはその両方を経験しており、これは15歳以上の女性の約30%に相当する。セクシュアルハラスメントを含まないこの割合は、過去20年間ほぼ変化を見せていない。暴力を経験した女性は、長期的な影響を受け、うつ病・不安障害・望まない妊娠・STIやHIV感染などの罹患率が高まるとされている[iii]。本調査対象者の女の子は、新たな脅威として浮上しているオンライン上の暴力を含む、自身が経験してきた暴力について語っている。

女の子の
91%
という極めて高い割合が、11歳までに暴力を経験したと報告している

「私たちには声を上げる権利があり、声を上げるに値する理由があります」

Davy、17歳(2024年)、カンボジア

ドミニカ共和国で妊娠により中途退学した後、職業訓練プログラムに参加し、現在ホテルで働く19歳の女性
© Plan International

暴力が許容されるべきではないと認識し、女の子たちは声を上げている

女の子の多くが、男性や男の子は暴力的・攻撃的な行動をとるよう社会化されることが多いが、そうした行動を変えることは可能であると指摘した。

「保護者の子どもへの接し方は、子どもの考え・行動・思考の仕方・子ども時代から生涯にわたる成長の仕方に影響を与えるからです」

Gabriela、17歳(2024年)、エルサルバドル

調査対象者の女の子は成長するにつれ、自身の安全を守る責任を負うのは自身だけではないと認識し、男の子と同様に自由や公共空間を享受する権利を訴え始めた。

暴力の横行

暴力は学校・家庭・コミュニティで発生している。調査対象国の多くで新たな法律が制定されているが、女の子の生活に実質的な変化にはつながっていない。

学校は暴力が最も頻発する場所であり、多くの場合、男の子の同級生からのハラスメントや虐待を伴っていた。

「男の子はバカで、女の子のスカートをめくるのが好きだから、私に男友達はいませんし、彼らに対して怖さを感じるので、男友達を作る気はありません」

Nakry、11歳(2016年)、カンボジア

家庭内の暴力も横行しており、彼女たちは、男の子と遊んだり外出するといった、不適切とされる行動に対し、しばしば外部の脅威から守るという名目での罰を受けていた。

調査対象者の女の子が思春期に入るにつれ、彼女たちがコミュニティで性暴力に遭う事例が増加した。

「小さい頃…1人で下校中に…昼間でした。ある橋に行くと、ある男性が現れ、彼はバイクから降り、下品な声で「俺のバイクに乗れ、家まで送ってやる」と言いました。彼がバイクから降りた時点で、私は急いで家へ走りました…だから、今は1人で歩くことはほぼありません」

Sen、15歳(2021年)、ベトナム

女の子が成長し、ソーシャルメディアを利用し始めると、彼女たちの多くが、不快なコンテンツの表示や望まない連絡、画像の受信など、オンライン上の暴力にさらされるようになった。インターネットは支えとなり得る一方、彼女たちがいじめやセクシュアルハラスメントに遭う、新たなスペースにもなっている。

「知らない男性が私にチャットをしてきて、無礼な言葉を使ったり[…]酷い画像を送ってきました。とても腹が立ちました」

Lina、14歳(2021年)、カンボジア

調査対象の女の子へのインタビューからは、先行きの見えにくい状況が明らかになった。彼女たちの純潔を守ろうとする保護者が、彼女たちの生活を制限する厳しい制約を課していた。長年にわたり、彼女たちの大多数は、ジェンダーに基づく暴力(GBV)に遭い、社会的規範の影響も受けた結果、男性からの暴力に関し自身を責め、虐待から身を守ることは自身の責任であるという考えを内面化していた。多くの女の子は、1人での外出を避け、男の子との友人関係構築を控え、暴力に遭うリスクを下げるための行動をとっていた。最終的に、彼女たちの多くは安全のために自由を犠牲にせざるを得ないと感じるようになり、結果として、彼女たちの機会が制限され、全体的な幸福が脅かされていた。

女の子の多くが、自分たちを守るべき機関に対する失望を示した

「もちろん、自分を守るべきなのは自分自身です。自分を守らなければ、誰も守ってくれないのですから」

Katerin、15歳(2021年)、ドミニカ共和国

紛争・避難・貧困は女性と女の子に対する暴力を増加させており、彼女たちの権利に対する反発が高まる中で、公私のあらゆる場面において、感情・身体・精神的暴力に晒される可能性が高まっている。

Gabrielaの物語

ブラジルにいるGabrielaは、高校の最終学年に在籍し、獣医学を学びたいと考えている。彼女は母親・姉妹・2歳の姪と一緒に暮らしており、姪の世話を手伝っている。

Gabrielaはコドーに住んでおり、そこでは犯罪や暴力が日常の一部となっており、強盗・ギャングによる暴力・殺人の発生率は高い。彼女の母親は、ブラジルの調査対象者の中で唯一、女の子自身に安全確保の責任を負わせることを拒否した保護者であった。その姿勢はGabrielaに大きな影響を与えた。他の人びとが安全のために女の子の行動を制限しようとする中で、Gabrielaの母親は***「[女の子の安全に関して]皆が責任を負うべきです」***と主張した。

Gabrielaは、自身のコミュニティで女の子が晒されている危険を認識しており、母親と同様、暴力や保護に関するジェンダー的な社会的規範に明確に反対の立場を示した。彼女は、男の子は元々暴力的・攻撃的になりやすいという考えを否定した。

> *「それは育ち方によります。[男の子は]攻撃的になることもあります。そうなるように教えられれば、そうなるでしょう。でも、すべての男の子がそうではありませんし、女の子が攻撃的になることもあります」*
>
> **Gabriela、18歳(2024年)、ブラジル**

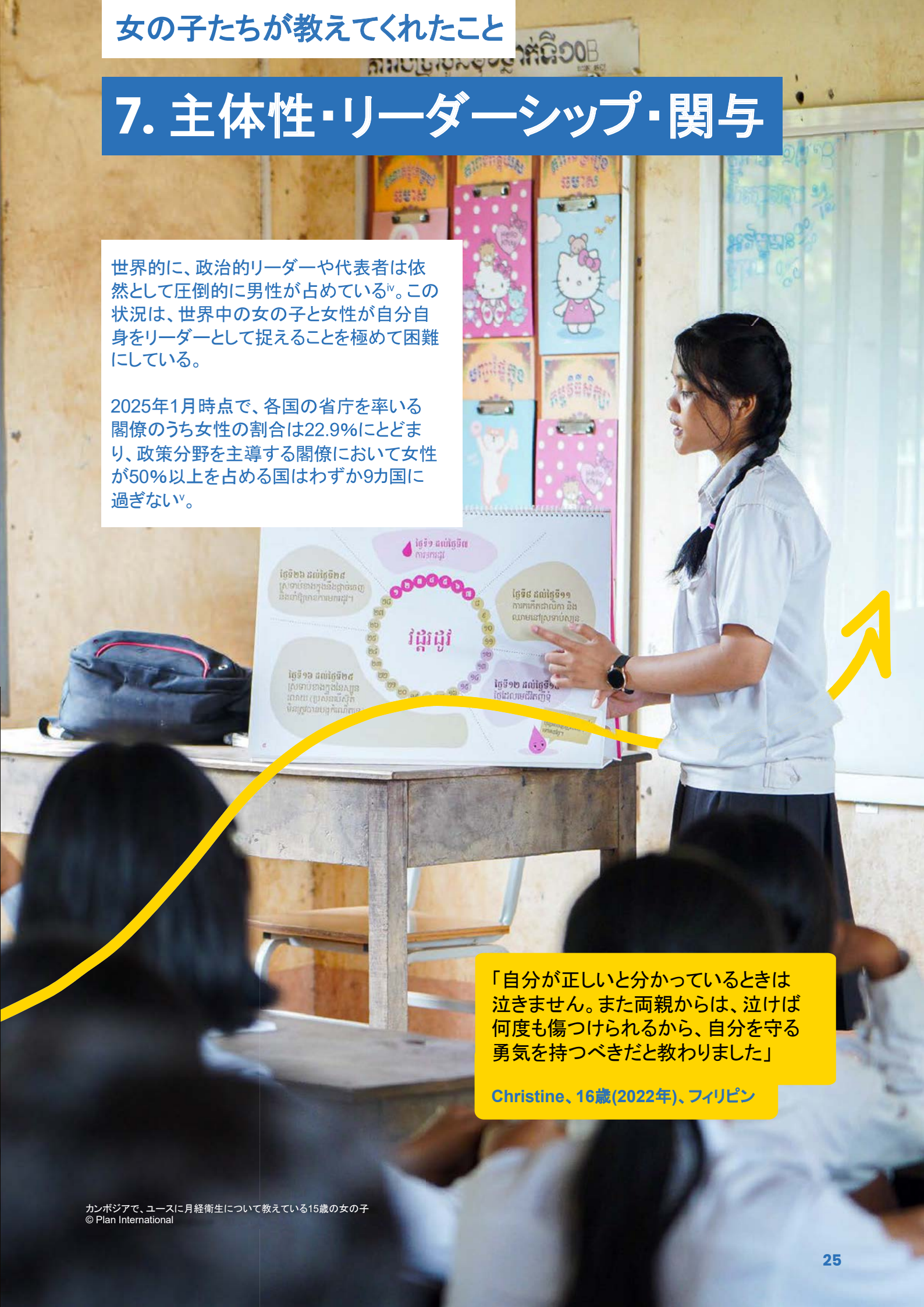
また彼女は、責任を加害者から女の子と女性に転嫁させる、被害者非難の言説に対しても、明確に反対の立場を表明した。

若い母親と娘、ブラジル
© Plan International

7. 主体性・リーダーシップ・関与

世界的に、政治的リーダーや代表者は依然として圧倒的に男性が占めている[iv]。この状況は、世界中の女の子と女性が自分自身をリーダーとして捉えることを極めて困難にしている。

2025年1月時点で、各国の省庁を率いる閣僚のうち女性の割合は22.9%にとどまり、政策分野を主導する閣僚において女性が50%以上を占める国はわずか9カ国に過ぎない[v]。



「自分が正しいと分かっているときは泣きません。また両親からは、泣けば何度も傷つけられるから、自分を守る勇気を持つべきだと教わりました」

Christine、16歳(2022年)、フィリピン

カンボジアで、ユースに月経衛生について教えている15歳の女の子
© Plan International

世界中の女の子は公的生活への参加に対する大きな障壁を経験しており、具体的には、以下のような障壁がある。

- 女の子の政治関与を阻む社会的・ジェンダー規範
- 女の子の意見が無視される、または真剣に受け止められないこと
- 公的な立場に立った際に生じ得る報復に対する恐れ
- 多くの公共の場や参加機会の享受ができないこと

調査対象者の女の子は困難を経験しているが、彼女たちの多くは、自分の意見が聴かれるようにしようと強く決意している。

「自分が正しいと分かっているときは泣きません。また両親からは、泣けば何度も傷つけられるから、自分を守る勇気を持つべきだと教わりました」

Christine、16歳(2022年)、フィリピン

調査対象の女の子は政治に関心を示し、投票権を得たらすぐに投票したいという意思を示した

「私は(ネット上で)自国で何が起きているか、大統領選の有力候補は誰かといった政治的事項…ロシアとウクライナの紛争の現状を確認しました」

Chesa、16歳(2022年)、フィリピン

調査対象者の女の子は全体的に、環境保護キャンペーン・ユース団体・パンデミック対策への関与により、コミュニティへの積極的な貢献を果たしており、その経験が、コミュニティへの積極的な関与に対する自信を高めている。

ベナンのTheaなど、自身の権利と、現地の意思決定に働きかけるためにいかにその権利を行使すべきかについての明確な理解を示した女の子もいた。

「はい、学校で私たちにも権利があると教わりました。だから、私たちに関係する決定が下される必要がある時は、生徒会長に自分の意見を伝えられます…もし彼が私の意見に耳を傾けない場合は、私と同じ懸念を持つ仲間の生徒を探し、皆で団結して校長先生のもとを訪れます」

Thea、16歳(2022年)、ベナン

大多数の女の子は当初、自身を将来の政治的リーダーとは考えていなかったが、そう考えていた一部の女の子は、リーダーシップの発揮によるコミュニティへの貢献に対する強い望みを示した。

「私は、夢を諦めず、望むものを獲得するまで粘り強く続ける、強く意志の固い人物になりたいです」

Bianca、17歳(2024年)、ブラジル

「リーダーになりたいです… 被選挙権が得られる年齢になったら。人びとのニーズに応え、病気の人びとを助けたいです。病気の人びとに対する薬の無料配布政策を実施します」

Rubylyn、15歳(2022年)、フィリピン

地方議員になることを望んでいたEssohanaにとって、女性リーダーの存在は特に重要だった。

「コミュニティへの貢献と国の発展のためです。また、女性が主導すると物事はうまく進みますし、女性が評価され、尊敬されていると実感できることが嬉しいからです」

Essohana、16歳(2022年)、トーゴ

調査対象者の女の子の大多数は、これまで公式な政治活動への関与経験がなかった

女の子は、年齢やジェンダーを理由に政治から排除されていると感じていると語った。意思決定は男性の領域とされることが多く、女性は家庭の役割に留めさせられている。そうした役割分担は、コミュニティの事項に関し男性の方がより活発で影響力を持つという考えを強化し、彼女たちが将来担う役割に対する認識を形づくり、政治的意欲を削いでいる。

「私たちの地域で、政治的事項に関して、積極的に活動している姿を見せているのは男性です」

Mahalia、15歳(2022年)、フィリピン

彼女たちはまた、女性政治家が男性政治家よりも不当に高い基準を求められていることを認識している。こうした二重基準は、安全面への懸念と相まって、彼女たちの多くが政治的関与をためらう要因となっている。

「男性リーダーと女性リーダーが同じ過ちを犯した場合、女性リーダーの方がより強く非難されます」

Hang、16歳(2022年)、ベトナム

彼女たちは、自分たちの意見が尊重されていないと感じており、また、政治制度はユースの声を反映するように設計されていないと指摘した。政治活動が行われる会場や場への到達・入場が困難で、公式な政治手続きに参加できなかったという。彼女たちは、ユースの要求が考慮されるとは考えていない。

「彼らは、私たちが若すぎて政治に関し意見を出すには早過ぎるとか、何も知らないと思っています」

Gabriela、15歳(2021年)、ブラジル

女の子と女性には、自身の意見を聴いてもらう権利があり、また多くの研究が、意思決定プロセスへの女性の関与がよりよい決定につながることを示している。女の子が公的生活への参加を避けている状況は残念なものであり、それは彼女たちが大人になってからの社会参加にも影響を及ぼす。市民社会スペースが縮小し、世界的に女の子と女性の権利が後退している状況の中で、公的生活における女の子の参画を保護し、促進することが必須となっている。

ベトナムで、リーダーシップスキル向上のためのチームビルディング活動に参加している女の子たち
©Plan International

8. ディーセント・ワークへの志望と道筋

調査対象者の女の子が成長するにつれ、彼女たちの将来の夢や希望について話を聞くようになった。彼女たちの中に目標を持たない者はおらず、それ自体が心強いことであった。彼女たちの多くが、自分の人生を有意義なものにし、他の人を助けるという確固たる決意を持っていた。彼女たちは、進学して心理学者・弁護士・写真家・翻訳者になることや、医療・教育・国際関係分野で働くこと、さらに仕立て・美容・農業技術を身につけることを望んでいた。

彼女たちの前途が阻まれ続ければ、私たちはリーダーや変革者の世代を失うことになる。社会が被る代償は計り知れない。国連の「Gender Snapshot」報告書[vi]によると、ジェンダー不平等が世界経済に及ぼす損失は10兆ドルと推定されている。しかし、夢を実現できないことによる個人的な損失は、言い表せない程深刻である。

「勉強がよくできれば、助産師になれます。それが私の夢です」

Fezire、17歳(2023年)、トーゴ

プラン・インターナショナル・フィリピンのYouth Caresプロジェクトの一環として、気候変動の影響に対応できるようコミュニティを率いる女の子たち
© Plan International

女の子の多くが、一般的に女性が多数を占めていない職業に就く自分を想像できると述べた

39%

の女の子がSTEM[7]関連職業への就職を希望しており、そのうち6名は医師になることを志していた[8]

女の子が望む職業:

- ベトナムのNhiは2022年、写真家を目指し、*「安定した仕事に就き…多くの人から称賛されるリーダーとなること」*を望んでいた
- エルサルバドルのGabrielaは、翻訳者になる、または国際関係分野で働くために、国際関係学と英語を専攻したいとしていた
- トーゴのAziaは2022年、保健大臣になることへの希望を語り、*"「コミュニティや国の人びとを助け、支えたい」*と述べた
- ブラジルのBiancaのキャリアの目標は、他の人を助けることを基盤としたものだった:

「[5年以内には]働き、大学に通い、母と一緒に暮らしているでしょう…バイクを所有し、今よりよい住居に住み…心理学を専攻したいと考えている事実は…前からずっと、自己肯定感や不安に関する問題を抱えている人びとを助けたいと夢描いてきたことの反映です…」

Bianca、15歳(2021年)、ブラジル

女の子の物語から、彼女たちが自身の夢を現実的で実現可能なものとして捉えるためには、教育を最優先できるような支援・身近な女性のロールモデルの存在・自分の時間の使い方について主体的に判断する力が必要であることが明らかである。

ジェンダー的な期待は、女の子の目標を形成・制限する

女の子は無償のケア労働を担うよう促され、他者へのケア提供が、女の子であることの1つの要素として重視される規範の中で育つため、他者を助けることは、示すべき重要な行動とされ、適切な職業選択とみなされる。

2024年までに、女の子の内最低でも20%が、教師・助産師・看護師を志望していた。

「看護師になりたいです[…]他の人を助けられるように」

Jasmine、14歳(2020年)、フィリピン

過度に重い無償のケア労働負担により、中途退学や教育・訓練に集中できなくなった女の子は、現在の自分にとって現実的で実現可能だと感じられる範囲に合わせて、自身の目標を縮小させる傾向を示した。

「デザインなど、私が全く知識を持たないものをお客様から求められることが時々あり、申し訳なく思います。学校に通っていれば、それを学べたかもしれませんが」

Namazzi、17歳(2024年)、ウガンダ

7 科学・技術・工学・数学。
8 世界のSTEM分野の労働力の40%は女性が占めている(ILO、2023年)。

Rebeccaの物語

ウガンダにいるRebeccaは、11歳の頃は看護師を夢見ていたが、15歳になると弁護士になることを志すようになった。家庭は経済的に困窮し、Rebeccaの母親は彼女に学校を辞めるよう勧めた。Rebeccaは数年間抵抗したが、2024年初め、家族が学費を支払えなくなったため、彼女は中途退学した。その後、美容師の養成コースの受講を試みたが、受講費も高すぎたため、諦めなくてはいけなかった。

Rebeccaの母親は妊娠を懸念して彼女を家にとどめたため、Rebeccaは18歳になるまでに1日約11時間を無償の家事やケア労働に費やすようになっていた。*「両親が[…]私の1日の過ごし方を決めます」*という彼女の言葉が示すとおりである。だが彼女は、美容院を開くという夢を諦めず、親戚をモデルに自主的に練習を重ねている。彼女の物語は、貧困やジェンダー規範が、女の子が現実的に追求できる夢の幅をいかに狭めうるかを示している。

プラン・インターナショナル・ウガンダの、ビジネス研修プログラムを通じて
女の子とユース女性を支援する取り組みAdolescent Girls in Crisisプロジェクト
© Plan International

9. 気候変動と食料不安

過去18年間、気候変動は私たちすべての生活に甚大な影響を及ぼしてきたが、特に元々日々の生活に困難を抱える人びとへの影響は特に深刻である。調査対象国の大多数で、女の子への影響は特に深刻となっている。

本調査の結果は、気候変動と食料不安が、彼女たちの教育を妨げ、健康と幸福を損なわせ、危害にさらされるリスクを高めている。

「収穫する予定でしたが、最近の豪雨のせいで、稲穂が実らなくなってしまいました。肥料が高額で、赤字です。悲しいです…でも、私たちは頑張ります。もちろん、どれだけ努力しても最終的にそうなってしまい、必要なものを満たせない、厳しいです。でも、食べ物が入手できることだけが、大事です」

Rosamie、16歳(2022年)、フィリピン

気フィリピンで、気候スマート農業プロジェクトの一環として稲を植えているユース
© Plan International

調査対象者の女の子の家族の大多数は、生計・食料源として農業や漁業に依存している。彼女たちは、家庭の食料不足や経済的なストレスが自身のメンタルヘルスに悪影響を及ぼしていると語り、空腹のために授業への集中が難しいとも話した。

「楽しみも休みもなく、食べ物も足りず、不満を感じ、心を閉ざし、苛立つようになり、幸せではありません」

Annabelle、14歳(2021年)、ベナン

また、気候変動による洪水や暴風雨によって、道路の損壊や校舎の損壊が生じた。

「天候の変動の激しさが学業の妨げになっています。いつも雨が降り…多くの授業時間が奪われてしまいました」

Darna、17歳(2023年)、フィリピン

気候変動へ対応するために積極的な取り組みを進める学校もみられた。女の子によると、異常気象発生時には休校となるが、学校はオンライン授業や補講の提供を行い、失われた授業時間を補っているという。

「降雨時には、生徒の通学路が悪路になることを先生たちは知っているため、降雨で授業の欠席者が多い場合、彼らは同じ授業を2度行います」

Alice、16歳(2023年)、ベナン

彼女たちは、気候変動に対しできることを積極的に行おうとしている。授業で適応策について学び、それをコミュニティで実践している女の子もみられた。だが、現在受けている気候変動教育の内容に不満を示した者もいた。

「気候変動が及ぼす影響や、それにより引き起こされる様々な事象に関して学びたいですが、学校の授業はそこまで深く掘り下げていません」

Annabelle、17歳(2023年)、ベナン

また、ブラジルのJulianaが「私一人の行動だけでは(気候変動を)解決できません」、と述べた通り、彼女たちはその事実も認識していた。彼女たちにもできることはあるが、彼女たちは意思決定者に対して変革を求めることもすべきである。

困難を経験してはいるが、調査対象者の女の子の多くは、レジリエンスと支援提供への強い意志を示した。インタビューからは、気候変動が彼女たちの状況をさらに悪化させる引き金となり得ることが明らかになった。気候変動は貧困拡大やコミュニティ崩壊を招く危険を孕んでいるのだ。教育・ジェンダー規範への挑戦・CEFMUの減少・SHRやメンタルヘルスに関するタブーの漸進的な解消といった、これまでに達成されてきた前進が、最終的に脅かされることになる。

Reynaの物語

フィリピンの沿岸地域の農家の家庭でReynaは育った。近年、気象の傾向がより極端かつ予測不可能になったため、作物が不作となり、彼女の家族の農業収入は減少していった。

「悪天候のせいで作物が傷んでしまい、食べ物が得られない時があります」

Reyna、16歳(2023年)、フィリピン

食費の工面に苦労した彼女の保護者は、副業をしなければならず、Reynaは家事と5人の甥の世話をする責任を課された。そのため、彼女は授業を欠席することが多く、家でも勉強できる時間がほぼなかった。

Reynaは授業で、気候変動の影響に耐えるために取るべき行動を学んだが、それだけでは彼女の家族を助けるには不十分だと感じた。そこで彼女は、貧しい農家が気候変動の影響に耐えられるよう、政府に支援を訴えた。

「作物の不作を防ぐ現在最善の策は、お金を提供することだと思います。お金があれば、肥料も灌漑も充実化でき、収穫までの間の家庭や学校でのニーズを満たすのに十分な資金を確保できるからです」

Reyna、16歳(2023年)、フィリピン

私たちが学んだこと

18年間にわたるジェンダー平等のために様々な取り組みが行われてきたが、女の子が依然取り残されていることは明らかである。彼女たちは母親の世代よりは恵まれているかもしれないが、彼女たちの人生の各段階で、ジェンダー規範は変わらず存在し、彼女たちの権利と機会を制限し続けている。本調査対象者の女の子は、立ち向かう能力・意欲を多くの場面で示してきた。だが、彼女たちだけでそれを実現することはできない。

教育

女の子の教育水準は彼女たちの母親のものを上回り、世代間で著しい前進が示された。しかし、女の子の良質な中等教育修了に対し、今も大きな障壁が存在する。コミュニティの慢性的な資金不足が、彼女たちの多くにリソース不足の学校に通わせ、通学に危険を伴わせ、彼女たちの教育の継続を脅かす状況を生んでいる。

女の子の提言:
学校や地域インフラへの投資、教員研修の強化、失われた授業時間の影響を軽減する代替手段の提供を行うこと。

無償のケア労働

調査結果は、同様の状況が広く見られることを示した。生計が縮小していく状況下で、男性親族ではなく女の子が、彼女たちの多くが極めて幼い頃から一層重い家事負担を負わされていた。その不平等な負担により、彼女たちは学校の課題に充てる時間がほぼなくなり、家族が教育費を払う価値を見出さなくなると、彼女たちは中途退学を強いられた。

女の子の提言:
教育の価値の理解の深化を意図した、プログラムによる保護者の支援・女の子の学業継続を可能にさせる、柔軟な学習の選択肢の提供・経済的障壁を軽減するための政府による現金給付・教育/技能習得/他の彼女たちの将来を形成する活動とどうバランスを取るかを自ら決定する自由の保証を行うこと。

健康

調査期間中、マラリア・腸チフス・栄養失調といった深刻な健康問題が頻繁に認められた。それらの問題の大半は予防可能なものであった。物理的・経済的障壁による適切な医療の享受の制限や、女の子の健康上のニーズが男性親族より軽視されていたことに起因していた。世界的に健康状況は改善し、保護者の中には好ましい行動をとるようになった者もみられたが、貧困・社会的規範・ジェンダー・年齢といった要素が、依然彼女たちの健康を著しく損なっている。2024年のインタビューでは、11名(約8名に1名)がメンタルヘルスに問題を抱えていると述べた。

女の子の提言:
コミュニティでの啓発活動による、正確な健康教育の実施と、利用可能で治療費が安価な診療所の現地への設置を行うこと。

SRHR

調査結果は、SHRの分野でも同様の状況が広く見られることが示された。利用可能なサービスの不足と制限的なジェンダー規範に基づく人びとの考え方が影響している。女の子は性に関する健康をより理解したいが、どこで情報が入手できるのか知らないと話した。保護者は、そうしたテーマに関する話し合いには早過ぎると考えがちで、自身の知識が不十分とも感じており、彼女たちに男の子との外出に対する警告以外の助言を与えられていない。

女の子の提言:
SRHRに関する前向きで開かれた世代間対話を促進する、保護者とユースを対象とした、利用可能で年齢に応じたサービス・コミュニティプログラムの提供を行うこと。

CEFMU

世界的に、CEFMUの発生率は低下しており、その傾向は本調査対象者の女の子の間にも表れていた。18歳未満に結婚した女の子にとって、CEFMUは中途退学の理由と同時にその結果でもあった。また、7名の女の子は母親でもあったが、彼女たちは育児サービスの欠如・代替的な学習機会の欠如・スティグマのために、再就学を妨げられていることが判明した。

女の子の提言:
法定婚姻最低年齢を18歳とする法的枠組みの全面的実施・女の子が司法の利用とCSEを含む教育を享受できるよう保証すること・CEFMUの根本原因に対応する包括的なコミュニティプログラムの展開を行うこと。

「年が経つにつれて、知識が深まり、内気さも少しずつ克服しています。この調査の参加により、プラン・インターナショナル・トーゴに私の声を聴いてもらう機会もできました」

Nini Rike、17歳(2024年)、トーゴ

暴力と保護

女性と女の子への暴力は、深刻な影響を及ぼしており、暴力は学校・家庭・広範なコミュニティで起きている。女の子が行動をとることを阻むのは、あまりにも多くの場合、自身の安全への不安である。保護者は心配し、彼女たち自身も思春期になると外出を恐れるようになり、結果として、孤立してしまう場合が少なくない。彼女たちは、暴力や虐待から身を守ることの責任は自身のみが負っており、それらに遭うことは自分自身に責任があること、と教え込まれていた。

女の子の提言:
女の子の有害な社会的規範の内在化に対する取り組み・ジェンダー規範やそれを支える社会的構造への挑戦・責任の所在や保護の負担の再定義・GBVに対する啓発促進を行うこと。

関与

女の子はコミュニティの政治活動や組織活動への関与を希望しているが、意思決定への関与機会はほぼなく、彼女たちの意見は聴いてもらえないことが多い。彼女たちは、自身に適用されているジェンダー規範の変革を強く望んでおり、多様な形で抵抗している。だが、女の子の権利に対する敵意の高まりは、彼女たちを実際的な危険にさらしている。彼女たちの声を上げるという願いは、恐怖により弱められている。彼女たちは、可視性の高まりが、コミュニティ内・ネット上で標的になることを招くのではないかと懸念している。

女の子の提言:
女の子のリーダーシップ発揮の機会提供・利用可能で安全な意思決定の場の創出・女性のロールモデルの可視化を行うこと。

展望

社会経済的背景は厳しいものの、女の子の3分の1超がSTEM関連の仕事への就職を望んでいた。だが、年が経つにつれ、ジェンダー的な期待や無償のケア労働により、その目標に制限が生じ、自身にとって実現可能だと考えられる範囲が縮小させられている女の子も多く見られた。

女の子の提言:
展望が見えなくなりつつある状況は、浸透しているジェンダー規範への挑戦の必要を示しており、具体的に、保護者とコミュニティリーダーとの協力による考え方への挑戦と、家庭内の役割が女の子の将来に及ぼす影響に関する啓発を行うこと。

気候変動

気候変動による気象現象は、今までになく女の子の生活に重大な影響を及ぼしている。家事負担の増大だけでなく、休校が起きることも多く、女子校には補習授業やオンライン授業を提供するためのリソースが欠如している場合が多い。また、貧困に対する対処戦略として、世帯収入の負担軽減を図って娘にCEFMUを強いる家族も現れ得る。各国で、彼女たちは季節ごとに家族の生計が不安定になっていくのを目にし、予測不可能な気象傾向への適応方法を学びたいと望んでいるが、学校の気候変動教育が不十分であることが判明した。

女の子の提言:
政府の家計支援策実施・学校の気候変動教育の内容の充実・リサイクル/植樹/啓発活動等、コミュニティの集団的気候変動対策の実施機会提供を実現させること。

「[現実の選択、現実の生活]の職員が私のことを気に掛けてくれて、どうしたのかと声を掛けてくれたり、大丈夫か確認してくれて、嬉しいです」

Melanie、17歳(2023年)、フィリピン

結論: 過去を振り返り、未来へ進む

本調査は、人生の中で、疎外、逼迫した公共サービス、ジェンダー規範がどのように相互作用し、女の子が自身の夢の実現のために必要な機会やリソースを制限しているかを明らかにした。教育水準の向上やCEFMUの減少等、世代間での著しい前進はみられたが、女の子の権利は今も脆弱で、不平等なままである。調査結果は、女の子の人生で一貫して認められたサービスの体系的な不足が、彼女たちの多くを取り残していることを示した。これまでに獲得してきた成果が失われる恐れがあることが、最大の懸念事項である。経済的圧力の増大・気候ショックの深化・世界的な保守化の傾向により、資金提供は縮小しており、女の子の権利擁護に対する政治的意志も後退している。抗議活動の実施は一層困難になりつつあり、女の子はレジリエンスと将来に対する意志を示しているが、本調査対象の女の子や将来の世代は、国際公約や国内法が存在するにもかかわらず、ジェンダー平等に向けた前進を維持するうえでの実際的な障壁に直面している。

本調査のような、複数国を対象とした長期的な調査は、次世代の女の子が充実した、社会に貢献できる人生を送るために必要な事項に関し、有益な知見を提供している。同様の取り組みが増えれば、これまでに達成した前進を守り、各国政府の政策や国際的な開発プログラム・取り組みが、女の子の権利に重点を置き続ける一助となるだろう。

プラン・インターナショナルは、女の子の権利と自由の擁護に尽力しており、包括的な手法により、女の子の学業修了・医療サービスの享受・身体の自己決定権の行使・暴力から解放された生活・ディーセント・ワーク機会の獲得・自身の生活に関わる決定に対する発言権の獲得を支援している。私たちは、9カ国・142名の女の子が本調査に参加してくれたことを光栄に感じている。その応答として、私たちは彼女たちのコミュニティで実現された前進を維持し、彼女たちの声や経験を今後の活動に反映させ、持続的な成果を残すことを約束する。

「今までは質問に答える以外の自己表現の方法を持っていませんでしたが、今は大人の前で話せるようになったので、[*現実の選択*、*現実の生活*]に参加できて嬉しいです」

Thea、17歳(2023年)、ベナン

プラン・インターナショナル・ベナンの職業訓練プログラムで提供されたミシンを使う16歳の女の子
© Plan International

提言

以下の提言は、本調査対象者の女の子の経験と、彼女たちの語りに基づいている。

全アクターに対し

- ジェンダー平等に向けた多部門間での取り組み・政策への資金提供および実施を行うこと。CEFMUの根本原因に対応する資金を十分に投入したコミュニティプログラムの実施・女の子の無償のケア労働の認知・ケア部門への投資・多様な女性のロールモデルの可視化・促進。
- 女の子を政策・プログラムの策定・実施に有意義に関与させること。

それらは、コミュニティ・学校・政府・市民社会組織(CSO)・国際NGO・その他の国際機関が実施する、女の子に影響を及ぼす諸課題に対応するものであること。

- 女の子を対象とした今後の長期調査活動への投資および実施を行うこと。女の子の声が効果的に反映されることを保証し、その調査結果が各レベルの今後の政策・プログラム策定に直接反映されるようにすること。

各国政府に対し

- 女の子の権利の後退を阻止し、回復させること。立法・重要政策で、ジェンダー平等と人権を明文化し、差別的な慣習法や宗教法、特に18歳未満の結婚を認める法を無効化すること。
- 部門横断的手法を採用すること。健康・教育・社会保護・気候変動への適応の各部門間で連携を強化し、以下の取り組みにより、健康状態や学習成果の低水準の根本原因に対応すること。
  - 十分な人員と設備を備えた、地理的にアクセス可能な医療施設への投資
  - 強化されたCSEを提供する、良質でアクセス可能な教育の保証
  - 防災計画の取り組みと学校インフラ・安全な通学路への投資の優先
  - 天候の影響や他の妨げによる授業の中断の影響を軽減するための取り組みの支援
- 学用品と助成金を提供すること。教育へのアクセス支援への支援とともに、気候変動の影響で収入が減少した世帯に対する経済的支援を行うこと。
- 政府は、CSO・NGO・地方自治体・学校・コミュニティリーダーと連携し、ジェンダー規範に挑み、知識不足を解消するための啓発活動や広報キャンペーンを実施すること。コミュニティでの安全で適切な医療受診行動の促進・女の子と保護者の絆の強化・女子教育の男子教育と同等の価値の強調・男性と男の子のケアへの関与の促進を図る啓発活動への資金提供・実施が例に挙げられる。

NGOとCSOに対し

- コミュニティの知識を強化すること。保護者の知識を深め、非暴力的な養育方法を促し、有害な社会的・ジェンダー規範に挑む世代間対話を展開させるワークショップ・プログラムを実施すること。

また、こうした取り組みは、公共空間における女の子の安全を確保するため、男の子や男性をケア労働や暴力防止に関与させることを含む。

地方自治体とコミュニティリーダーに対し

- 危機に瀕している女の子を支援するため、公共サービス、特に教育と医療に関して強化すること。地方自治体は、女の子の学業継続を可能にする機会を拡大するため、良質な代替教育の選択肢を拡充し、コミュニティ主導の学習の取り組みを推進すること。

同時に、保健当局は、コミュニティと協力して、包摂的で年齢に応じた保健教育プログラムを共同策定し、サービス提供体制や情報共有を充実させること。

学校に対し

- 学校をジェンダー包摂的な環境にし、女の子のリーダーシップを育成すること。包摂的な環境で、生徒の多様なニーズに応え、生徒が市民としての権利を理解し、行使できるようにするための、教職員研修やカリキュラムを提供すること。
- 女の子のニーズに応えるカリキュラムを導入すること。教職員が効果的な指導のための研修を受けたうえで、気候変動教育を実施することや、十分なリソースを投入し、文化的背景に即した内容で保護者の関与を促し、支援体制を構築し、人間関係や幸福に関する開かれた対話を促進する、CSEの実施が求められる。

脚注

i. World Bank (2024) Primary completion rate, female (% of relevant age group).
以下にて入手可能: https://data360.worldbank.org/en/indicator/WB_WDI_SE_PRM_CMPT_FE_ZS?view=datatable

ii. Plan International (2020) Overview: Inclusive Quality Education.
以下にて入手可能: https://plan-international.org/publications/overview-inclusive-quality-education/

iii. UN Women (2025a) Facts and figures: Ending violence against women.
以下にて入手可能: https://www.unwomen.org/en/articles/facts-and-figures/facts-and-figures-ending-violence-against-women.

iv. Plan International (2022) Equal Power Now: Girls, Young Women and Political Participation.
以下にて入手可能: https://plan-international.org/publications/equal-power-now/

v. UN Women (2025b) Facts and figures: Women's leadership and political participation.
以下にて入手可能: https://www.unwomen.org/en/articles/facts-and-figures/facts-and-figures-womens-leadership-and-political-participation

vi. UN Women (2024) Progress on the Sustainable Development Goals: The Gender Snapshot 2024.
以下にて入手可能: https://www.unwomen.org/en/digital-library/publications/2024/09/progress-on-the-sustainable-development-goals-the-gender-snapshot-2024.

登校中の女の子、ブラジル
© Plan International

謝辞

これまで「*現実の選択、現実の生活*」調査プロジェクトにご協力いただいた女の子・彼女たちのご家族・コミュニティの皆さま全員に、心より感謝申し上げる。長年にわたる皆さまからの貴重なご意見・ご協力なしでは、本調査は実現し得なかった。ベナン・ブラジル・カンボジア・ドミニカ共和国・エルサルバドル・フィリピン・トーゴ・ウガンダ・ベトナムのプラン・インターナショナルの国別事務所が、全データ収集の監督を行った。長年にわたり、多くの方がデータ収集に関わってきたが、直近の本調査の担当窓口としてご尽力くださった以下の皆様に深く感謝申し上げたい。ベナンのRoland Djagaly・ブラジルのAna Lima・カンボジアのVannara Ouk・ドミニカ共和国のOlga Figuereo・エルサルバドルのJulia Brenda LopezとCelina Rosales・フィリピンのRomualdo Codera Jr.とManny Madamba・トーゴのJoseph Badabadi・ウガンダのDavid Aziku・ベトナムのTrung Truong Vu。

本概要報告書は、Keya Khandaker博士が執筆し、Sharon Gouldsが編集した。報告書全編は、Kit Catterson博士・Keya Khandaker博士・Adèle Pavéが執筆した。

編集・諮問委員会の皆様に心より感謝申し上げたい。Awa Faly Ba・Jacqueline Gallinetti博士・Anna MacSwan・Danny Plunkett・Damien Queally・Charlotte Stemmer。

調査結果および提言に対して評価とご意見をお寄せいただいた皆様に、感謝申し上げたい。Anya Gass・Consuelo Laso・Mishka Martin・Johanne Westcott-Simpson・Emebet Wuhib-Mutungi・Tendai Manyozo・Geeta Davi Pradhan・Tinotenda Hondo・Maria Paula Suarez・Stu Solomon・Yona Nestel・Barbara Scettri・Andina Syifa・Belén Estefania Garcia Gavilanes・Smarika Pokhrel。

2021年以降、本調査はカナダ・デンマーク・フィンランド・フランス・ドイツ・アイルランド・スウェーデン・スイス・イギリスの各国のプラン・ナショナル組織から多大な資金提供を受け、プラン・インターナショナル・グローバル・ハブが運営を担当した。2021年以前は、プラン・インターナショナル・イギリスが本調査の運営・資金提供を行っていた。

2026年発行。本文 © Plan International

デザイン・レイアウト: Oskar Design

Until we are all equal

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、子どもの権利を推進し、誰もが平等な世界の実現を目指し85年以上にわたり世界80カ国以上で活動する国際NGOです。一人ひとりの子どもが本来持つ力を引き出すことで地域社会に前向きな変化がもたらされることを信じて、子どもや若者、さまざまなステークホルダーとともに活動しています。特に、貧困や暴力、差別や排除によって弱い立場に置かれている女の子の支援に力を入れています。

子どもや女の子たちが直面している不平等を生む原因を明らかにし、その解決にむけ取り組むことで、子どもたちが生まれてから大人になるまで寄り添い、自らの力で困難や逆境を乗り越えることができるよう支援します。

誰もが平等な世界の実現にむけて、歩みを止めずに進んでいきます。

プラン・インターナショナル・グローバル・ハブ
Dukes Court, Duke Street, Woking, Surrey
GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155
Fax: +44 (0) 1483 756505

E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org
facebook.com/planinternational
twitter.com/planglobal
instagram.com/planinternational
linkedin.com/company/plan-international
youtube.com/user/planinternationaltv